

同朋大学仏教文化研究所 2020 年度前期史料展示

どうぼうわきょう

「同朋和敬—学園の理念と歴史《3》—」

- ◆会期：2020 年 7 月 11 日（土）～30 日（木） ＊ただし限定公開・オンライン解説
- ◆会場：同朋学園複合施設 D オプラザ 閣蔵 1 階ギャラリー D オ

ごあいさつ

本年（2020 年）は、同朋大学が、東海同朋大学として昭和 25（1950）年 2 月 20 日に開学して 70 年となります（同朋大学 70 周年）。また、明年（2021 年）は真宗専門学校が大正 10（1921）年に開かれて 100 年となります（同朋学園 100 周年）。

本研究所では、すでに 2010 年（大学 60 周年）に『同朋和敬—学園の理念と歴史《1》—』、翌年（学園 90 周年）に同展示《2》を開催いたしました。このたび、同展示《3》を開催いたします。

今回の展示は、《1》《2》の内容を再構成して第 1 部「閣蔵長屋から真宗専門学校へ」、第 2 部「東海同朋大学から同朋大学へ」とし、さらに「写真・パンフレット・ポスターから見る同朋学園の歴史」を新たに第 3 部としました。学園史料とともに、第三代学長山上正尊の御自坊である本慶寺様ゆかりの史料を主に展示しています。

新型コロナウイルス問題に直面する現在、当初の予定を組み替え、また全面的な公開展示はできず、オンライン解説も試みての 2020 年度前期ギャラリー史料展示となりました。ただし今回は本研究所が D オプラザ 閣蔵 1 階ギャラリーで毎年度定期的に行う史料展示として記念すべき 30 回目の節目にもなり、前向きに取り組みました。

この展示が、多くの方にとって、同朋大学、また同朋学園の理念と歴史を学ぶ機会になっていただければ幸いに存じます。最後になりましたが、本展示の実現にご尽力、ご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

2020 年 7 月 11 日 同朋大学仏教文化研究所 所長 安藤 弥

プロローグ—「同朋和敬」の淵源—

同朋学園は、鎌倉時代に浄土真宗を開いた親鸞の「同朋（どうぼう）」と、日本仏教の祖として崇敬される聖徳太子の「和敬（わきょう）」とをもって「建学の理念」としている学園である。

親鸞は、ともに教えを聞く人たちを「弟子」ではなく「同朋」と呼んだ。その親鸞が「和国の教主」として敬った聖徳太子は『十七条憲法』で「和（やわ）らかなるをもって貴（たつと）し」「篤く三宝を敬え」と説いた。

本当の意味での「同朋」の関係は、私たちが浄土真宗の本尊である阿弥陀如来の光に照らされて真に「和」し、お互いの異なることを「敬」い合うことで成り立つ。

「閲蔵長屋」をはじめとし、「真宗専門学校」を経て昭和 25（1950）年に開学した本学は、この「同朋和敬」という建学の理念を掲げ、それを「共なるいのちを生きる」「Living in Diversity」とも言い表し、その実現を常に目指しながら、歩み続けている。

1 『末燈鈔』 1冊 図書館蔵（真専図書） 版本・江戸時代

親鸞消息（手紙）の書写収集本の一つで、従覚の編集とされる。第 19 通（消息集広本第 2～4 通）に、ともに教えを聞く関東の仲間を指して「同朋」の言葉がみえる。本書は明和 4（1767）年、恵琳（東本願寺学寮講師）の識語を持つ江戸時代の版本。表紙には「真宗専門学校図書」のラベルが貼付される。

2 親鸞絵伝 4幅 研究所蔵 絹本着色・大正 2（1913）年

親鸞は平安末～鎌倉時代の僧侶で、法然を師として専修念仏の教えを聞き、浄土真宗を開いた。その教えは、阿弥陀如来の本願（絶対他力）により煩惱具足の凡夫である我らが救われるというもので、多くの人びとの心を捉えている。その親鸞の生涯を全 15 段にわたり描いたのが、この絵伝である（曾孫覚如撰述）。

3 『聖徳太子伝暦』 2冊 研究所蔵 版本・貞享 4（1687）年

「和敬」という言葉は、聖徳太子の『十七条憲法』にある「和をもって尊し」（第 1 条）、「篤く三宝を敬え」（第 2 条）による。本書は平安時代の成立とされる、もっとも有名な聖徳太子伝であり、写本・版本等で広く流布した。その推古十二年条（太子 33 歳）に『十七条憲法』の全文を載せる。

4 聖徳太子影像 1幅 研究所蔵 絹本着色・明治 36（1903）年

親鸞は聖徳太子を「和国の教主」と仰ぎ崇敬した。この絵像は真宗寺院の本堂余間に掛けられるものである。聖徳太子は日本の歴史上、いわば日本仏教の祖としてひろく崇敬される。また太子が建立したとされる四天王寺には四箇院が設置され、そのなかの一つ非田院は日本最初の社会福祉施設ともいわれる。

5 住田智見書『十七条憲法』第 10 条 1幅 個人蔵 紙本墨書

同朋学園の学祖である住田智見（すみだちけん）が聖徳太子の『憲法十七条』第 10 条の全文を書き表したものの。本文中盤にある「我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫（ただひと）ならくのみ」は親鸞の「愚禿」「同朋」精神に通じる。「凡夫」（ぼんぶ）の字が本紙のほぼ中央にあるのは住田が意図して配置したもののか。

第 1 部 閲蔵長屋から真宗専門学校へ

[文政 9（1826）年「閲蔵長屋」開設]

ダイジェスト「同朋学園の歴史」(A) 閲蔵長屋

同朋学園の淵源は、文政 9 (1826) 年に東本願寺名古屋御坊 (現真宗大谷派名古屋別院) 内に設置された「閲蔵長屋」に求められる。江戸時代の後期に本山東本願寺は相次ぐ火災で堂舎焼失と再建を繰り返し、そこで再建理念としての「法義相統」を確かめる教学の振興が叫ばれた。その気運のなか、名古屋御坊で教学研鑽の場たる学寮の開設運動が展開されたのである。

本山との交渉の結果、「学寮」ではなく「閲蔵長屋」として許可されることになったが、名古屋御坊内にはすでに大蔵経を収めた経蔵があった。「閲蔵長屋」とはその大蔵経を閲覧する場所という意味であり、それは今でいう図書館であった。建物の建設は文政 10 (1827) 年に行われたが、造作から開設後の運営に至るまでの諸経費などは、すべて青木楽聞夫婦という篤信の門徒によって寄進されている。

「閲蔵長屋」には僧侶のみならず、近隣の学徒が通ったようであり、蔵書は広く社会に公開する意義を有した。そうした図書館的性格は常に保ち続けたが、同時に学寮としての実質的機能も有し、講義なども行われた。明治時代になると学制により変遷を経て「私立尾張中学」へと展開し、また明治 40 (1907) 年には「名古屋仏教図書館」が開設されることになった。

6 『尾張名所図会』 13冊 図書館蔵 (真専図書) 版本・天保 15 (1844) 年

前編が天保 15 年 (1844)、後編が明治 13 年 (1880) に刊行された全 13 冊からなる尾張国の地誌。前編第 2 冊の末尾に「東本願寺掛所」(名古屋御坊) の図が描かれ、境内の南東部分に「学寮」とある。これが同朋学園のはじまりの場である「閲蔵長屋」である。僧侶らによる学問の場であり、後には地域にも開かれる仏教図書館になった。

7 住田智見写真 (額) 1枚 同朋大学 (成徳館 2 階会議室) 蔵

住田智見は明治元 (1868) 年生まれ。名古屋市祐誓寺住職。真宗大谷派学階講師。専門は仏教学 (真宗学)。真宗大学研究科卒業後、真宗尾張中学教授、真宗大学教授等を歴任し、大正 10 (1921) 年に開学した真宗専門学校の教授に就任。校長等の職は固辞し一教授に徹した。昭和 13 (1938) 年 7 月 1 日命終 (成徳院智見)。院号は「成徳館」の名称の由来。

8 一柳知成写真 (額) 1枚 同朋大学 (成徳館 2 階会議室) 蔵

真宗専門学校の設立者である一柳知成 (いちりゅうちじょう) は明治 8 (1875) 年生まれ。名古屋市養照寺住職。専門は漢文学。真宗大学卒業後、金陵東文学堂 (中国) 経理、金沢政教新聞社勤務を経て、東本願寺宗政に関与。自坊に帰り、後に私立尾張中学の校長に就任。住田の「真宗学」の志願を実現すべく仲間たちとともに真宗専門学校を創立した。

[大正 10 (1921) 年「真宗専門学校」創立]

ダイジェスト「同朋学園の歴史」(B) 真宗専門学校

大正 10 (1921) 年、「私立真宗専門学校」(真専) が開学した。6 月 13 日付で文部省より認可されたため、同朋学園はこの日を開学記念日としている。

真専開学の中心にいたのは、住田智見と一柳知成である。故あって京都の真宗大谷大学の教授職を退き、名古屋の自坊祐誓寺に帰った住田であったが、住田を慕う人びとにより、真専開学が企図された。ただし、住田自身は開学以降、校長等の役職につくことなく、一教授として過ごした。理事長そして初代校長となり、経営上の責任を担ったのは、一柳知成である。

同朋学園は、住田智見を学祖と位置付けている。真専が目指した学の方向性は、校名からもわかるように、あくまで真宗を中心とし、そこから仏教を総合的に受けとめていくというものであった。住田自身、そのことを清沢満之から学び、当時、混迷の中にあつた京都ではなく、名古屋で仲間とともに、その実現を目指したのである。

真専は最初、名古屋別院内の終わり中学に間借りするかたちで始まり、大正 15 (1926) 年に校舎が建設された。その後、戦時体制への対応もあり、八事に新校舎を建設し、移転したのが昭和 17 (1942) 年、第 2 代校長稲葉圓成の時代のことである。

そして、戦中の困難を乗り越えて戦後に至り、新制大学への道を歩むことになっていく。

9 財団法人真宗専門学校寄付行為 1 枚 学園本部保管

活字印刷 大正 10 (1921) 年

私立真宗専門学校の設置認可とともに、民法第 34 条により「財団法人真宗専門学校」の設立も許可された。この 1 枚は、その際に提出された寄付行為の内容である。第 1 条「本財団法人ハ、真宗教學ノ研究ニ須要ナル學科ヲ教授シ宗門有用ノ人材ヲ要請スルヲ目的トス」から第 15 条にわたる内容を持つ。

10 真宗専門学校長印 1 点 図書館蔵

縦書で「真宗専門學校長」と陽刻された印。真宗専門学校長を務めたのは、初代一柳知成と、2 代目稲葉圓成の 2 人のみである。

11 真宗専門学校年報・要覧・学則・生徒心得 1 綴 本慶寺蔵

冊子 昭和 6~14 (1931~1939) 年

昭和 10~13 年の『真宗専門学校年報』、昭和 6 年の『要覧』、昭和 10~13 年の『年報』内の『学則』、一冊本刊行の昭和 14 年『学則』、年代未詳の『生徒心得』からなる。昭和 14 年の『学則』には、山上正尊自筆(戦後)により「昭和十四年四月ヨリ施行改正学則」とある。時局の要請により修身教科などが設けられたことによると考えられる。

12 真宗専門学校教職員学生名簿 1 綴 本慶寺蔵

謄写版 昭和 2 (1927) 年

昭和2(1927)年9月時点での真宗専門学校教職員と学生(在校生・卒業生)の氏名と住所等が記載された名簿。住所の大半は名古屋市内をはじめ東海三県に集中するものの、それ以外の地域(青森・秋田・埼玉・東京・福井・新潟・石川・広島・大分・熊本)の住所もあり、全国から入学していたことがわかる。

1 3 昭和四年以降真宗専門学校名簿 1綴 本慶寺蔵

昭和4~16(1929~1941)年

昭和4~15年の「真宗専門学校(九臈会)名簿」と、昭和16年の「真専報国団名簿」をまとめたもの。九臈会は在学学生を正会員、教員を賛助会員、卒業生を特別会員として構成された。九臈(きゅうこう)とは、幾重にも曲がって奥深い沢という意味である。同会は大正11(1922)年設立で昭和15年まで続き、翌年「真専報国団」と名称が変更された。

1 4 スクラップブック 1冊 学園本部保管 昭和14~19(1929~1941)年

表紙に「真宗専門学校事務室」とある。昭和14年(1939)から昭和19年(1944)にわたる新聞記事に切り抜きや写真が貼られている。作成担当者は筆跡から当時の職員安藤伝瑛と知られる。別院から八事への移転、また戦時体制へと突入し、軍事教練や関係者の出征に関わる内容など、当時の様子がうかがえる。

1 5 『落』 7冊 学園本部保管 手書謄写 昭和10(1935)年

『落(ふき)』は、真宗専門学校本科生杉浦環がその最終学年に編集責任者となって発行した同人雑誌。在学学生をはじめとする同人が、ペンネームを用いて論説・随筆・詩歌・短歌・俳句・漫画などを投稿し、披露している。創刊号から第7号までで廃刊となったが(杉浦の卒業のため)、当時の学生サークル的な活動の様子がうかがえる貴重なものである。

1 6 『真専学報』創刊号・第2号・第3号 3冊 学園本部保管・本慶寺蔵 手書謄写 大正14・15(1925・1926)年

創刊号は大正14(1925)年10月1日付で真宗専門学校九臈会雑誌部から発行された。同会は、会則によれば年1回の弁論大会、伝道演習、研究会、旅行視察、機関誌発行を活動内容とした。その機関誌としてまず『真専学報』発行(創刊号冒頭は住田智見「思念三則」)、その後、『九臈』『真専報国団誌』『法鼓』と改称を重ねた。

1 7 『法鼓』 1冊 学園本部保管 活字印刷 昭和22(1947)年

昭和20(1945)年の敗戦を契機に真宗専門学校報国団は法鼓会と改称した。その機関誌『法鼓』の創刊号は昭和22(1947)年1月付で発行された。内容は藤井智海による巻頭言、稲葉圓成、小島叡成の文章に続き伝記・小論・随筆・部報から構成される。同第54号(昭和24年1月)には学園創設に関する論考もある。

1 8 別院内校舎写真〔パネル〕 1枚 学園本部保管

真宗大谷派名古屋別院内に建設された真宗専門学校の校舎。当初は私立尾張中学に間借

りするような形であったが、大正 15 (1926) 年に新校舎の建設が始まり、翌昭和 2 (1927) に完成した。洋瓦葺木骨セメント塗りの建物 1 棟で、大講堂 2、講義室 1、研究室 1、教授室兼事務室 1、学生室 1 の構成で、延べ 104 坪であった。

19 八事校舎写真〔パネル〕 1 枚 学園本部保管

八事に移転・新築された真宗専門学校の校舎。昭和 17 (1942) 年に移転完了。正門を入った玄関の正面に校長室と応接室、職員室があり、さらに教室 1、研究室 1、図書館という構成の建物の奥に渡り廊下でつないで教室棟があった。教室棟には 1~3 学年各教室と、仏壇を設置した講堂などがあった。

20 講堂内集合写真〔パネル〕 1 枚 個人蔵

昭和 25 (1950) 年ころの写真と考えられる。校旗は「真専」であるが、後ろに住田智見、一柳知成、そして稲葉圓成の写真が掛けられている。稲葉命終後であることは明らかで、東海同朋大学の開学式典は昭和 26 (1951) 年 3 月 26・27 日挙行的ため、この間の撮影か（稲葉地学舎移転記念か）。

*なお、後方上部に掛けられている「帰依行善」の額は「愚郊」すなわち東本願寺第 24 世 闡如（大谷光暢）から贈られたものである（現在も成徳館 12 階ホールに掛額）。

第 2 部 東海同朋大学から同朋大学へ

〔昭和 25 (1950) 年「東海同朋大学」開学〕（仏教学部仏教学科）

ダイジェスト「同朋学園の歴史」(C) 東海同朋大学のはじまり

真宗専門学校（真専）は戦後、昭和 25 (1950) 年 2 月 20 日付で新制大学に昇格認可され、同年 4 月 1 日に東海同朋大学が開学した。初代学長に稲葉圓成が就任し、ついに大学としての道のりを歩み始めることになったのである。

開学に至る過程は困難をきわめた。昭和 20 (1945) 年の敗戦後の変革で、昭和 22 (1947) 年には現行 6・3・3・4 の新学制のスタートが決められた。旧専門学校制度の廃止に伴い、真専は新制高校に改変するか、大学に昇格するか岐路に立ち、「仏教王国たる東海地区に仏教的色彩を持った大学」を目指すべく、後者を選んだのである。しかし、大学昇格には大学キャンパスとなる土地確保や教授陣の整備が不可欠であり、総合学園の構想があった一方で土地問題や学舎整備の問題が未解決であったこともあり、昭和 24 年の昇格は見送られた。そこで総合学園構想は将来を期し、土地確保（現名古屋キャンパスとその周辺地の購入）と仏教学部仏教学科の単科大学としての申請という体制を整え、翌年の昇格認可となったのである。

この過程で、稲葉や小島叡成、藤井智海らの教授陣、それに加えて創設事務局長に就任し

た安田力からは文字通り奔走した。そして、彼らを支えたのが真宗大谷派の七教区（名古屋・岡崎・岐阜・大垣・高山・桑名（現三重）・長浜）、父兄会・同窓会、学生一同に至る有縁の人びとだったのである。

その後、稲葉の急逝により、学長事務取扱を経て第2代学長に就任した安田力、そして第3代学長山上正尊の時代に、大学はまた新たな段階を迎える。

2 1 稲葉圓成写真（額） 1 枚 同朋大学（成徳館 2 階会議室）蔵

真宗専門学校第2代校長にして、東海同朋大学の初代学長となった稲葉圓成（いなばえんじょう）は明治14（1881）年生まれ。岩倉市覚順寺住職。真宗大谷派学階講師。真宗大学卒業後、同研究科を経て同大学嘱託教授。昭和13（1938）年に一柳知成が逝去したため、住田智見に請われて真宗専門学校教授となり、校長職を引き継ぐ。さらに同年に住田もが逝去したため、その志願を引き継ぐ姿勢で、戦中・戦後の混乱期の学校を支えた。病身を押して大学昇格に関わる激務に携わり、昇格を成し遂げた昭和25（1950）年の6月21日に急逝した。初代学長に就任してわずか3か月足らずのことであり、関係者を慟哭させた。

2 2 文部省認可書コピー綴 1 冊 学園本部保管

東海同朋大学等からの諸申請に対する文部省からの認可書をコピーして保存した綴。昭和25（1950）年2月20日付文部大臣名による東海同朋大学設置認可書や、昭和27（1952）年2月29日付文部事務次官名による教職課程（宗教科・社会科）設置認可書から、昭和40年代ころまでの各種申請に関する書類綴である。

2 3 同朋大学設立趣意書 コピー4 枚 学園本部保管

稲葉圓成が東海同朋大学創設委員会の委員長として、昭和24（1949）年4月付で述べた内容。原本は現存不明でコピーのみ残る。稲葉はこの趣意書で、戦後の新しい日本再建のために仏教主義による同朋大学の設立が必要とし、その根幹に聖徳太子の精神を述べ、さらに近い将来の仏教主義による総合学園化を展望している。

2 4 東海同朋大学印 1 点 図書館蔵

横書・陽刻で「名古屋市市中村区稲葉地町／東海同朋大學」と刻まれた印。左から右へ記されているところに戦後の特徴が見える。東海同朋大学の学長職についたのは、稲葉圓成、安田力（やすだいさお）、山上正尊（やまがみしょうそん）の3名である。山上の学長時代に、東海同朋大学から同朋大学（どうほうだいがく）へと名称変更することになる。

2 5 教職課程設置要項追加申請書 1 綴 学園本部保管

東海同朋大学における教職課程設置に関する要綱の追加申請書。昭和27（1952）年7月29日付で東海同朋大学長安田力の名前で、文部省大学学術局教職員養成課長あてに提出されたものである。先に同年2月29日付で宗教科と社会科の教職課程は認可されたが、国語科が難航したようで、教職課程に関わる教員の確保に苦心した様子がうかがえる。

26 安田力写真（額） 1枚 同朋大学（成徳館2階会議室）蔵

安田は明治7（1874）年生まれ。桑名市法泉寺に入寺し、本山寺務所に勤め、寺務総長、宗務総長等を歴任後、同朋学園創設に関わった。学園理事長・第2代学長を務めると同時に、昭和27（1952）年に開園した同朋幼稚園の初代園長にもなる。昭和32年に引退、昭和37年に逝去（89歳）。

[昭和27（1952）年「同朋幼稚園」開園]

27 『東海同朋学園要覧』 1冊 本慶寺蔵

昭和28（1953）年2月調製の東海同朋大学の要覧。活字印刷。冒頭の「本学の目的と使命」には、東海同朋大学が仏教学部仏教学科の単科大学として認可された経緯等が記される。特に東海同朋大学は新制大学とはいえ、閼蔵長屋と真宗専門学校に連なる長き伝統と歴史を持つ仏教学、とりわけ真宗学に立脚した私立大学である旨が強調される。

28 稲葉地校舎前集合写真〔パネル〕 1枚 学園本部保管

昭和25（1950）年1月10日に稲葉地（現在地）に移転した直後の写真とみられる。新築の木造校舎を後ろにした学生・教職員の集合写真で、最前列中央に安田力、その隣に稲葉圓成がいるから、稲葉逝去の6月21日以前の撮影である。学舎移転記念か。

29 『名古屋教報』再刊第24号 学園本部保管

『名古屋教報』は真宗大谷派名古屋教務所が発行していた機関誌。現在の『名古屋御坊』の前身とみられる。その再刊第24号（昭和25年3月1日付）で新制大学昇格認可に関する諸記事が載る。名古屋教区をはじめとする東海七教区が支えての開学であった。なお、この号を含む『名古屋教報』が一綴で保管され、貴重である。

30 東海同朋大学建物増築工事写真〔パネル〕 1枚 学園本部保管

稲葉地学舎は、昭和25（1950）年4月には建物があったが、新築といっても急造の木造校舎四棟が野原にぼつんと建っている様子で、建物自体未完成な部分が多く、窓ガラスのない吹きさらしの状態で講義をしたという。建物の整備が進み、増築が始まったのは、昭和30年代に入ってからのことであった。

31 山上正尊写真（額） 1枚 同朋大学（成徳館2階会議室）蔵

山上は明治23（1890）年に本慶寺（海津市）に生まれ、真宗大谷大学本科・研究科を経て真宗専門学校教授となる。後に東海同朋大学教授（真宗学）となり、図書館長などを歴任後、第2代学長となる。理事長・幼稚園長・高校長を兼ね、さらに音大・造形の開学時の学長になるなど学園史に多くの事績を残す。昭和44（1969）年逝去（79歳）。

[昭和33（1958）年「東海同朋大学附属高等学校」開校]

〈★現「同朋高等学校」〉

[昭和 34 (1959) 年「同朋大学」改称]

ダイジェスト「同朋学園の歴史」(D) 同朋学園の展開

仏教学部仏教学科の単科大学としてスタートした東海同朋大学は定員 40 名なるも初年度は第 1 学年 19 名、第 2 学年 24 名であった。昭和 30 (1955) 年には教職課程 (国語・社会・宗教) が認可され、「同朋大学」への改称を経て、仏教学部を文学部に改め、社会福祉学科を設置した昭和 36 (1961) 年では仏教学科定員 30 名に入学 11 名、社会福祉学科定員 40 名に入学 5 名と厳しい状況が続いた。昭和 39 (1964) 年には国文学科を増設したが、やはりなかなか定員は満たなかった。

しかし、仏教精神の学問的・社会的実践として設置された社会福祉学科は福祉を学ぶ大学の場として東海地域で 2 番目に早いものとされ、昭和 40 年代には急速に学生数を増やしていった。その中で昭和 43 (1968) 年、社会福祉学科の中に保母課程を設置したことも新たな挑戦であった。そして昭和 59 (1984) 年に社会福祉学部社会福祉学科が設置認可され、現在の社会福祉学部・文学部の 2 学部の大学となったのである。

ところで、学園としては昭和 27 (1952) 年に同朋幼稚園、昭和 33 (1958) 年に東海同朋大学付属高等学校 (現同朋高等学校)、昭和 40 (1965) 年に名古屋音楽短期大学 (現名古屋音楽大学)、昭和 42 (1967) 年に名古屋造形芸術短期大学 (現名古屋造形大学) をスタートさせている。そのいずれにも深く関与したのが山上正尊であった。山上は特に音大・造形の初代学長にもなっている。山上は時に学生たちと緊張関係を持ちながらも両大学初期の発展に尽力した。また、法人名を「学校法人同朋学園」とするの、山上理事長の時代であり、昭和 40 (1965) 年のことである。2020 年で 55 年となる。

3 2 『同朋大学学則』 1 部 本慶寺蔵

昭和 36 (1961) 年 4 月 1 日より施行された本学の学則。第 1 条には「本学は教育基本法及び学校教育法に基づき、仏教精神により、広く知識を授け、専門の学術を教授研究し、併せて人格を陶冶し、人類文化及び社会福祉に貢献する人物を養成することを目的とする。」と本学における教育の目的が記されている。

[昭和 36 (1961) 年「社会福祉学科」設置] (★現「社会福祉専攻」) (仏教学部を改め、文学部仏教学科・社会福祉学科)

3 3 『同朋大学新聞』第 10 号 1 部 本慶寺蔵

昭和 36 (1961) 年 3 月 14 日刊行 (発行所同朋大学学生自治会)。トップ記事が「福祉学科誕生」で山上学長による「我が大学の構想」が掲載され、「同朋学園」構想、大学名称変更、社会福祉学科増設などの経緯と意義について示される。また、「今日の問題 宗教と社会福祉」といった論説も付されている。

34 本館新築時学園全景写真〔パネル〕 1枚 本慶寺蔵

木造校舎に加えて新築された本館は鉄筋3階建てで、昭和33(1958)年2月6日起工式、同年8月15日竣工という。当時の大学とその周辺がよくうかがえる貴重な写真である。

35 本館・旧館・正門写真〔パネル〕 1枚 本慶寺蔵

正門は本館建築から少し遅れて翌昭和34(1959)年1月には完成したようである。東側の垣根を少し切り開けての施工で、稲葉地移転後に設置された初めての門であった。

第3部 写真・パンフレット・ポスターから 見る同朋学園の歴史

36 同朋幼稚園教職員写真〔パネル〕 1枚 学園本部保管

同朋幼稚園は昭和27(1952)年4月に東海同朋大学の敷地内に開園した。この写真には初代園長の安田力、開園以来16年にわたり主任教諭・主事であった菊田との代をはじめとする幼稚園草創期の教職員が写っている。

37 同朋幼稚園盆踊り写真〔パネル〕 1枚 学園本部保管

年次不明であるが、同朋幼稚園が開園した昭和27(1952)年の盆踊りの写真が『同朋学園七五年史』に掲載されており、同年の写真の可能性が高い。浴衣姿の園児・保母に加えて初代園長安田力や職員安藤伝瑛が写っている。

38 『同朋学園祭 1962』 1綴 本慶寺蔵

昭和37(1962)年11月に同朋大学の本館校舎(旧A号館)が竣工した際に記念に開催された同朋学園祭のアルバム帖。学園祭は11月10日から14日まで行われ、大学構内のみならず中学・高校、さらに幼稚園の校舎までも使った学園全体の盛大な催しであった。

39 『竣工記念 同朋学園 1962』 1冊 本慶寺蔵

昭和37(1962)年の同朋学園祭に併せて実施された竣工記念行事のパンフレット。「同朋学園竣工記念運動会プログラム」等も綴られている。さまざまな催物があった中で、学園史的内容を含む資料展覧会も実施されたことがわかる。

**[昭和39(1964)年「国文学科」設置]〈★現「人文学科」〉
(文学部仏教学科・国文学科・社会福祉学科)**

40 『学園の歩み 同朋学園 1965』 1冊 本慶寺蔵

昭和40(1965)年に同朋学園創立45年及び名古屋音楽短期大学開学を記念して刊行された学園史的内容の小アルバムである。閲蔵長屋や真宗専門学校の歴史を詳しく述べ、さらに同朋学園の歴史について、写真図版を多用し、わかりやすく示している。

4 1 『同朋大学 1966〈入学案内〉』 1 枚 本慶寺蔵

昭和 41 (1966) 年度の入学案内パンフレット (折り畳み)。文学部の社会福祉学科は社会福祉 30 名・産業福祉 30 名、また仏教学科 20 名、国文学科 20 名の定員で募集されている。別科 (仏教専修) の前身となる東海専修学院 (定員 30 名) の募集も記されている。

4 2 『同朋大学 大学案内』 1 冊 本慶寺蔵

山上正尊学長が「本学の伝統とその使命」を冒頭に記す。刊行年の記載がないが、沿革に昭和 40 年 (1965) 4 月の名古屋音楽短期大学開設の記事があり、またカラー版 (前年のパンフレットは白黒) であることなどから、昭和 42 (1967) 年度と推定される。

4 3 『同朋大学 大学案内 1968』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 43 (1968) 年度の大学案内。前年度よりもサイズが大きくなり、また、学内行事等の写真が増えている。この年から社会福祉学科に保母課程が設置され、社会福祉・産業福祉の両コース制度が廃止された。

[昭和 43 (1968) 年、社会福祉学科に保母課程設置]

4 4 『同朋大学入学要覧 1969』『学生募集要項 1969』 各 1 冊 本慶寺蔵

文学部にあった社会福祉学科・国文学科・仏教学科の 3 学科ともに仏教精神に基づいた人間観をもってそれぞれの学問を修めることに重点を置くとする。学科紹介に加えて、クラブなど学生生活の雰囲気や伝わる写真が多数掲載された入学要覧と学生募集要項である。

4 5 『(第 1 回) 同朋大学祭』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 41 (1966) 年 10 月 16 日から 23 日に「同朋の輪の中で無気力を突き破り真理を追求しよう！」の統一テーマをあげて開催された第 1 回目の大学祭のパンフレット。冒頭の文章からは、学生の自主性が明確に表れた形での実施であったことがうかがえる。

4 6 『第 2 回 同朋大学祭』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 42 (1967) 年 10 月 6 日から 11 日に開催された第 2 回目の大学祭のパンフレット。大学祭の統一テーマは「つぶやきを声に一私達をとりまく社会を見つめ今こそたしかな一歩を一」であった。

[昭和 59 (1984) 年「社会福祉学部社会福祉学科」設置]

(社会福祉学部社会福祉学科・文学部仏教学科・国文学科)

4 7 同朋高校書類綴 (1965) パンフレット・ポスター等 1 綴 本慶寺蔵

同朋高校生徒募集パンフレットと、同朋高校修学旅行関係書類 (昭和 39~40 年)、同朋高校新聞などが一綴りとなったもの。ポスターは最初期の入試広報の実態がうかがえるものとして貴重である。

4 8 『同朋高等学校要覧 (1967)』 1冊 本慶寺蔵

年次の記載が無いが、沿革に昭和 42 年 (1967) 4 月 1 日、音楽科と衛生看護科の開設が記され、また翌年度の要覧には同年 9 月で電話番号が変更する旨が記されていることから、昭和 42 (1967) 年度の要覧と判断できる。

4 9 『同朋高等学校要覧 (1968)』 1冊 本慶寺蔵

昭和 43 (1968) 年度の学校要覧で、普通科・商業科・音楽科・衛生看護科が紹介され、募集されている。施設・宗教教育・生徒の自主活動の写真が多く掲載され、雰囲気がよくうかがえる。なお、この年、衛生看護科が第 1 回戴帽式を挙行了した。

5 0 『学園祭 (同朋高校 1967)』 1冊 本慶寺蔵

昭和 42 (1967) 年度の高校学園祭のパンフレット。この年は、同朋高校創立 10 周年記念にあたる。前年度まで学園祭は学園全体で行われたが、創立 10 年を記念し、高校独自の学園祭が実施された。体育祭が 2 日目にあり、学園祭の一連行事であった。

5 1 『学校祭 (同朋高校 1968)』 1冊 本慶寺蔵

昭和 43 年 (1968) 10 月 1～4・7 日に開催された同朋高等学校祭のパンフレット。学校祭は、1 日に宗教部法話から始まる文化祭、2・3 日に体育祭 (予選・本大会)、4 日に文化祭 2 日目を行い、5 日に後片付け、日曜日を挟み 7 日に式典開催というスケジュールであった。

[昭和 40 (1965) 年「名古屋音楽短期大学」開学]

〈★現「名古屋音楽大学」〉

5 2 『第 1 回芸術祭 (名古屋音楽短期大学 1968)』 1冊 本慶寺蔵

昭和 43 (1968) 年 10 月 7～10 日に開催された名古屋音楽短期大学第 1 回芸術祭のプログラムパンフレット。東別院の青少年ホール・ヤマハホール (ヤマハビル)・ダンスパーティー (大商ホール)・ガーデンパーティー (運動会) の四会場で大規模に開催された。

5 3 『昭和 43 年北海道修学旅行概要 (名古屋音楽短期大学学生課)』

1冊 本慶寺蔵

名古屋音楽短期大学の昭和 43 (1968) 年度の修学旅行概要。行先は北海道で、9 泊 10 日であった。猛暑の中京を逃れ、清涼な北海道へ旅行し、おいしい牛乳・ビールなどを楽しもうといった触れ書きがあり、雰囲気がよく伝わるパンフレットである。

5 4 『名古屋音楽短期大学 卒業演奏会』 1冊 本慶寺蔵

昭和 44 (1969) 年 3 月 11～13 日に中電ホールを会場とした名古屋音楽短期大学主催の第 3 回卒業演奏会のプログラムパンフレット。第 2 夜にはオーケストラの演奏があり、ベートーヴェンの「運命」などが演奏された。

5 5 『名古屋音楽短期大学 昭和 44 年度 学生募集要項』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 44 (1969) 年度の募集要項で、本科 (器楽〈ピアノ・弦楽・管楽・打楽〉専攻・声楽専攻・作曲専攻) 約 50 名および専攻科約 20 名を募集する。本科の試験は初日に国語・英語・理論、2・3 日目が実技試験であった。

[昭和 42 (1967) 年「名古屋造形芸術短期大学」開学]

〈★現「名古屋造形大学」〉

5 6 名古屋造形芸術短期大学開学式典書類 一括 本慶寺蔵

名古屋造形芸術短期大学の開学記念式典は昭和 42 (1967) 年 10 月 7 日、学園祭期間中に実施された。記念式典の次第、披露パーティーの実行計画、大学祭並芸術祭のスケジュール計画などが綴じられている。

5 7 『第 1 回芸術祭 (名古屋造形芸術短期大学)』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 42 (1967) 年 10 月 4～9 日に開催された名古屋造形芸術短期大学第 1 回芸術祭のパンフレット。名古屋初めての私立美術大学として開学しわずか 6 か月を経過したばかりでの開催であり、パンフレットには学生の無邪気で、実は過激な言葉が見出される。

5 8 『第 2 回芸術祭 (名古屋造形芸術短期大学)』 1 冊 本慶寺蔵

昭和 43 (1968) 年 10 月 9～12 日に開催された名古屋造形芸術短期大学第 2 回芸術祭のパンフレット。洋画・日本画・彫塑・ビジュアルデザイン (VD)・プロダクトデザイン (PD) という各専攻の学生が、「人の目」という統一テーマのもとで制作発表した。

5 9 名古屋造形芸術短期大学学生募集ポスター 1 枚 本慶寺蔵

昭和 44 (1969) 年度の名古屋造形芸術短期大学学生募集のポスター。ポスターの右下端部に「専攻科 (44 年度設置予定)」とあり、実際に同年 1 月 6 日、造形芸術科に 1 年制の専攻科設置が認可され、同年度より 23 名でスタートしている。

**6 0 『名古屋造形芸術短期大学 入学案内 1969』『昭和 44 年度 学生募集要項』
各 1 冊 本慶寺蔵**

昭和 44 (1969) 年度の名古屋造形芸術短期大学入学案内・学生募集要項。入学案内では、日本画専攻、洋画専攻、彫塑専攻、ビジュアルデザイン専攻、プロダクトデザイン専攻のカリキュラムや実習授業写真、また研修旅行などの写真が紹介されている。

**6 1 同朋学園 (名古屋造形芸術短期大学) 小牧キャンパス航空写真 (1984)
〔パネル〕 2 枚 学園本部保管**

6 2 名古屋造形芸術短期大学建物写真〔パネル〕 1 枚 学園本部保管

- 6 3 同朋学園名古屋キャンパス航空写真（1952）〔パネル〕
1 枚 学園本部保管
- 6 4 同朋学園名古屋キャンパス航空写真（1966）〔パネル〕
1 枚 学園本部保管
- 6 5 同朋学園名古屋キャンパス航空写真（1975 頃）〔パネル〕
1 枚 学園本部保管
- 6 6 同朋学園名古屋キャンパス航空写真（1983 頃）〔パネル〕
1 枚 学園本部保管
- 6 7 同朋学園名古屋キャンパス航空写真（1992）〔パネル〕
1 枚 学園本部保管
- 6 8 成徳館写真〔パネル〕 1 枚 学園本部保管
- 6 9 昭和 48 年 3 月卒業写真〔パネル〕 1 枚 学園本部保管
- 7 0 知文会館写真〔額〕 1 枚 個人蔵

付 記

1. 本解説は、同朋大学仏教文化研究所 2020 年度前期史料展示「同朋和敬—学園の理念と歴史《3》—」（同朋大学 70 周年記念）の開催にあたり、オンライン配信のため、作成したものである。
2. 本解説の執筆・編集作業は、同朋大学仏教文化研究所において行い、安藤弥（所長）・千枝大志（所員）・川口淳（所員）が担当した。
3. 史料番号は本解説と展示と一致する。また、解説文においては敬称を略した。
4. 解説文については「同朋和敬—学園の理念と歴史《1》—」ならびに同展《2》の内容を援用・参考にした部分もある（改訂して用いた解説文もある）。
5. ダイジェスト「同朋学園の歴史」（A）～（C）については同展《2》において制作したパネル文章である。（D）については今回、新たに執筆した。2021 年の同朋学園 100 周年に向け、さらに研究が必要である。